

SDGsでコーディネートするカリキュラム・マネジメントの取組

山口県立響高等学校 蒼下和敬

1 問題の所在

2018年公示の学習指導要領では、持続可能な社会・地域づくりに向けて諸課題を探究する学びが強調された。特に地理（地理総合・地理探究ともに）では、「国際連合における持続可能な開発のための取組などを参考」（p.52ほか）にした教育活動を展開するよう求めている。また、同年に示された学習指導要領解説（地理歴史編）では、その好例として「国際連合が定めた持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals；SDGs）」（p.58ほか）を挙げている。

響高校（以下「本校」とする）の地歴公民科では、2018年度2学期前半において、3年生の授業でSDGsの17のテーマについて班別に調べて発表する学習を行った。生徒は前向きに取組み、学習活動としては充実していたものの、1班（1テーマ）あたりの発表が授業者の補足説明を含めても10分程度にとどまり、学習の深まりに課題を感じていた。この授業を参観に来ていた校長から、「この班（再生可能エネルギー）の発表は、理科学的な側面もあるし、家庭科とも連携できそう。カリキュラム・マネジメントを活かして発展させてみてはどうか」という助言があった。現在、学校教育では、主権者教育、消費者教育、キャリア教育など社会的な要請を受けたいわゆる「〇〇教育」が多数立ち上がっているが、それらはそれぞれ個別に実施され、相互の関連付けを図るまでに至ることができない場合も多い。SDGsの17の課題目標は、そうした諸課題を包摂しており、これまで個別的であったそれぞれの教育活動を体系化する一つの展開軸となり得ると考えた。そこで、家庭科等各教科の担当者に相談し、次のような教育実践仮説を立てて、SDGsを踏まえた教育活動を日常的に継続可能な形で考え、試行的に始めることとした。

<SDGsの可能性を基にした本校の教育実践仮説>

SDGsの17の目標は、教科を超えて学習内容を紐付ける学習活動の媒介者となり、学校の教育活動全体を活性化させ得るのではないかと考えた。

2 「SDGs」と「カリキュラム・マネジメント」

上の小見出しの両語は、学習指導要領上は今回が初登場となる。

「SDGs」（Sustainable Development Goals）は、2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発目標」として、貧困や環境問題等、世界で見られる諸課題を17の目標付けされたテーマに分け、2030年までにその解決へ向けて国家・企業・団体・個人の違いを超えて取組もうとするものである（図1）。



図1 SDGsの17の目標とデザイン化されたタイル

「カリキュラム・マネジメント」は、詳しくは学習指導要領（第1章総則第1款5）に記載があり、これを基に本校でも全教職員の理解が得やすい表現で次のように定義付けした。

<本校SDGs教育における「カリキュラム・マネジメント」のディフィニション>

各教科・科目で個別に計画・実践・評価・振り返る教育課程の運用から、教科・科目、その他の教育活動それぞれはベースとしつつも、それぞれの教育活動が互いの教育内容を意識して有機的につながり、例えば共通した内容を各教科同時に指導したり、順序を入れ替えたりしながら、授業者・学習者双方が授業で学ぶ意味を見いだしたり、価値づけたりできるよう、教育課程全体が活性化するように運用すること。

3 取組の実際

本校では、SDGs関連の一連の学習・教育活動を「Hibiki SDGs Project～だれ一人取り残さない～」と名付けて開始した。以下、本校での取組の実際のうち、主なものを報告する。紙幅の制約により、かなり省略した説明となっている点をご了承いただきたい。詳細は、本稿末尾に記載のウェブ上のPDFでご参照いただきたい。

3.1 シールを媒介物とした取組

本校では、SDGs17の課題目標それぞれのテーマごとに描かれたデザインを17cm×17cmのシールにし、シールを教育活動の様々な場面で活用することにより、生徒が学んだ内容とSDGsを紐付けられるようにした（図2）。シールは、生徒も教職員も自由に活用できるように、校内の数カ所にシールスタンドを設置したり、シールを入れた箱を授業等に持ち出したりできるようにした（図3）。



図2 シール化されたSDGs タイル

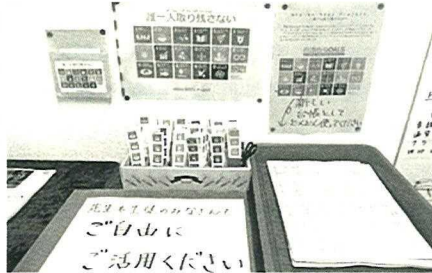


図3 校内に設置したシールスタンド

3. 2 SDGsに関する基礎的な学習（取組の一例）

3. 2. 1 地歴科をコア科目としたSDGs自体に対する基礎学習

学習活動が始まった時点では、SDGsとはどのようなものかを理解している生徒・教職員はほとんどいなかった。まずは、生徒にSDGsがどのようなものであるかを理解させる学習に取り組んだ。各クラス2人程度のペアを組んで17班に分け、1～17の各課題目標を調べて発表する形態をとった。生徒には全校集会等を通して学校全体がSDGsを通じた活動に取り組むことを周知していたこともあり、どのようなものかを理解しようとする意識が高く、それが取組の様子にも現れていた。（図4・5）



図4 調べてまとめる活動

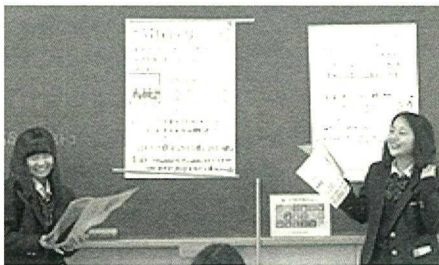


図5 発表（相互評価）の様子

3. 2. 2 地歴科以外の教科・科目・活動における取組の例

地歴公民科以外の教科・活動では、各授業等の中で、SDGsがめざす諸課題の解決に関連する学習場面で、その課題目標のシールを配付した。例えば、家庭科では調理実習の際に「12：つくる責任つかう責任」を配付して、計画から振り返りまでの過程における学びの視点としたり、数学科では「1辺12cmの厚紙に展開図をかいてできる立体で、容積が64cm³以上となるものを示せ」という課題学習において、「11：住み続けられるまちづくりを」を示し、都市の居住空間等限られた条

件での最大限の結果を追求する学びに位置づけたりするなど、真正の文脈に関連付けた。次第に、生徒から「先生は〇番と関係あると言っていたけど、私は〇番も関係していると思うので、シールください」という声が各教科で上がるなど定着が見られ、今学んでいることがどの課題に向き合うものなのかという学びの意味づけ（レリバンス）を高める効果があった。

3. 3 SDGs学習にむけた雰囲気づくり

3. 3. 1 情報共有の拠点「SDGs通り」の整備

本校では、教職員も含んだ校内全体でSDGsを通じた知の共有を図るため、校内数カ所の廊下を「SDGs通り」とし、SDGsシールスタンド、ユニセフ等の関連資料コーナー、企業から集めたCSRレポートの閲覧コーナー、JICA地球ひろばの展示を基にSDGs17目標の書籍を揃えたSDGsサテライト図書館、そして生徒が発表した成果物の掲示コーナー等を置き、自由に見たり触れたりできるようにした（図6・7）。また、校内で展開された学習や活動を、生徒・教職員が投稿しながらSDGsの視点で一覧表にして振り返る「SDGs Project Check」（通称「カリマネボード」）コーナーを設置し、本校での諸課題学習に関するカリキュラム・マネジメントに役立つようにした。



図6 SDGs コーナーの様子



図7 学習成果物を見る生徒

3. 3. 2 対話性を意識した「SDGs通信」の発行

本校では、SDGsに関する校内外の動きについて情報の共有を図るため「SDGs通信」を発行した。「SDGs通信」は、A3両面で作成され、表面は本校での取組や全国的な動きを紹介した内容を掲載し、裏面は、校内の学習や日常生活でSDGsに関係する場面を紹介する「イチオシSDGs」を生徒に書かせた中から約25人分をコピーして掲載した。特に裏面は、生徒がお互いの視点が分かると評判がよかったが、

教職員からも授業の振り返りに役立てられていた。

3. 4 発展的な学び

3. 4. 1 保護者を人的資源にした民間企業のCSR理解

当初は、SDGsは本校で勉強する教材に過ぎないと捉え、実社会に広がっている取組であるという認識を持たない生徒もいた。そこで、SDGsをCSR活動の中核に据えている大手飲料水メーカーの取組について、専門資格を持って勤務する保護者を講師に招いて「持続可能な社会づくり学習会～企業が取組む水と森の豊かさを守る活動～」を開いた。本校にとっては環境教育やCSR学習として、また企業にとっては学校現場でのCSR（SDGs）を通じた社会貢献として共に初の試みとなった。この取組は、報道機関を通して広く知らせることができた。

3. 4. 2 校内販売団体を活用したソーシャルビジネス理解

SDGs活動が進むと、生徒から「一定数集めたら記念品みたいなものがもらえないか」等の提案が出た。この提案には意見が分かれたが、生徒の参画も尊重して「実現可能ならやってみる」方針で検討し、「ただ記念品をもらうというだけでなく、社会を支え合いにも繋がる仕組み」にすることにした。そこで、パンを校内販売しているNPO法人と提携し、条件を定めてパンの交換券を申請できるようにした（図8）。このNPO法人は、障がいのある方の就労支援事業としてパン店を運営している。「交換が地域貢献に役立つ」ことが理解されるようになると、多様な生徒が申請するようになったことは印象的であった。



図8 NPO法人と提携したパンの交換会
(交流を通して活動の理解を深めた生徒も多い)

3. 4. 3 地元小学校と連携したSDGs学習交流会

SDGs活動のまとめとして、地元の小学校を訪問しSDGsを紹介して、共に社会の諸課題に関する学びを深める学習交流会を実施した。交流会は、これまで学習してきた17班によるポスターセッション交流の形をとった。生徒は、発達段階に応

じた資料作りや話し方などを学び、小学生4～6年生を対象として準備やリハーサルを重ねたが、小学校側から1～6全学年で行いたいという意向があり、改めて作り直す等、手探りながらも教職員と生徒が総がかりで取組み、当日を迎えた（図9・10）。

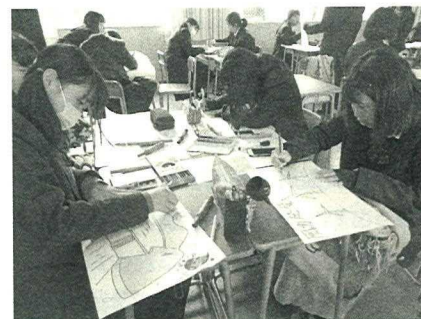


図9 小学生向けの準備



図10 当日の学習交流会

4 おわりに

本稿は、近隣の高校との統合により2019年度で閉校する。いわゆる閉塞感が見られる中で、SDGsを通じた学習・教育活動は、学習の意味づけを高め、学校の雰囲気をも明るくし一体感を持たせることに確実に寄与している。課題もあるが、取組んだ成果は大きいものがあった。

本校のSDGs活動では、評価にも力を入れ、定期考査において各教科でSDGsを通して得た知識や見方考え方を問う出題を試みたり、定期的なアンケートを実施したりすることで、生徒の学びの広がりや深まりを充実させるよう試みているが、主な実践例を報告することだけで紙幅の条件に達してしまい、言及することができなかった。詳しくは、下に示した実践記録に収録しているので、ご参照いただきたい。

《参考：本校取組の詳細な記録について》

山口県立響高等学校「SDGsを通じたカリキュラムマネジメントの試み（実践記録）」広島大学学術情報リポジトリに収録。